

中国鏡にみられる准堤信仰

服 部 法 照

一 はじめに

中国における銅鏡の歴史は非常に長く、漢・唐時代を最盛期として、多くの遺品が残されている。従来、鏡の研究は主に考古学や美術史の方面から研究されてきた。そのため、製作時期の古い、または美術的な価値の高い鏡、つまり唐時代以前の作例が主な対象とされてきた。そして宋時代以後の鏡は美的な魅力の乏しいものが多いため、注目されることが少なかった。そのため編年も完全とはいえない状況である。

さて、鏡は顔や物を写す鏡面に対して、背面には様々な文様が時代の流行と共に表現されている。装飾としての意味も大きい。その当時の人々の思想や信仰がうがわれるものも多い。題材の主流となるのは、やはり中国の土着信仰である神仙思想や、道教的な内容を持った文様である。

これらの鏡背文様のうち、仏教に関係したものもいくつかみることができる。しかし、全体からすると本格的な仏教文

様は数が限られている。ここで取り上げる准堤信仰に関係した鏡は、まさに仏教文様の代表であるといえる。これらの准堤関係の鏡には、ランツァ体の梵字が表現されており非常に興味深い。ところが従来、検討の機会が少なく、梵字の内容も不明とされている場合が多く、製作時期も漠然と元時代頃とみなされているものが多かった。これらについて梵字の内容を確認し、また、やや時代が下る可能性を指摘したい。

二 准堤に関係した鏡の分類

准堤に関係すると思われる鏡を、大きく三種に、さらに八種に細分した。なお、すべて鏡面は円形である。字はほとんどが内向き（字下部が中心側）に配列されている。（馮晏海他『金策』・川村宗嗣『中国古鏡図説』・孔祥星『中国銅鏡図典』等参照）A梵字（漢字音写も含む）のみ。鈕（つまみの紐を取り付ける部分）あり。

①准堤真言等：鈕には梵字（Om?）がある。円形の界線を挟

dhā-kotīñāṃ tad-yathā om cale cule cunde svāhā)・仏頂大輪一字明王真言（一字大輪呪・大輪一字呪）（部林 bhūṇ）の順に真言が説かれる。音写に用いられている漢字は、鏡に見られるものとはほぼ同一である。また、これら五種の真言を唱えられなければ准提神呪だけ、それも無理なら唵字以下だけでもよいとする。准提真言の前半部は帰敬詞であり、唵字からが正呪であるという。これを「九聖梵字」とも記している。鏡に表現された真言には、唵字以下の九字が存在するのはこのためである。

ここで、もう一つ注目すべきなのは六字大明真言が説かれることである。この真言はすでに『大乘莊嚴宝王経』に見られ、また、経中には准提神呪に近似した真言も説かれる。そのため、道殷は「即ち此の六字大明と准提真言の次第、相須と知るなり」とする。これが、先の鏡に六字大明真言を含むものが存在する理由である。

さて、『顕密心要』にも、鏡を用いた修法が述べられている。成就壇法として、未使用の新鏡を仏像の前で、十五日の夜に東に向かい鏡を置いて座る。そして鏡を一百八遍呪して、袋に入れて身に付けるとする。「密蔵之中、今此の鏡壇を最も要妙と為す、一切諸壇を総撰す」と重視する。さらに、息災法・増益法・敬愛法・降伏法・出世間法という五種壇法ものべるが、すべてに准提像の前に鏡壇を安置するとし

ている。このような鏡の重視が、後世に影響を与えている。

四 明末清初の准提信仰

さて、これらの經典等により、准提に対する信仰が浸透していったが、とくに明代の終わりから清代の初めにかけては、その信仰は盛んであり、次のような著作が続蔵経に収録されている。

- ①『準提浄業』（明、謝千教著）②『大准提菩薩焚修悉地懺悔玄文』（清、夏道人集）③『准提三昧行法』（明、受登集）④『准提心要』（明、堯挺撰）⑤『持誦准提真言法要』（清、弘贊輯）⑥『七俱胝仏母所説準提陀羅尼経会釈（準提経会釈）』（清、弘贊会釈）

以上については、すでに多田孝正氏の諸論考がある。これらの著作における鏡に関係した記述に注目してみたい。

①には、一円相があり、陀羅尼布字法として円相図が示される。「心月梵字觀門」は唵字を中心にして九聖梵字を周辺に配した円相で、鏡の造形に影響を与えたと思われる。また、「准提真言持誦便覧」には、『顕密心要』から引用したと思われる浄法界真言から一字大輪真言までが記されている。また、鏡壇についても述べている。

②には、項謙・掃道人・道盛による三種の序がある。掃道人は、『顕密心要』が、世に広まったことを述べている。特

に注目したいのは、項謙の父、蘭齋公項俊が、「准提宝鏡を鑄造し施した」との記述があることである。先の鏡のうち、どれかがこれに当たるのであろう。

③には、鏡を用いる修法には触れていない。真言も准提真言のみみられ、梵字は九聖梵字のみを記す。④は、浄法界真言以下の真言・梵字がみられ、鏡についても触れている。⑤は、鏡壇について触れ、梵書准提真言を記す。⑥には、「円明布列梵書図」が載せられるが、先の「心月梵字観門」と同図である。また「持誦法要」として浄法界真言以下を説き、鏡壇も述べる。

五 おわりに

以上みてきたように、鏡の文様として、准提に関係する真言や准提像が表現されるのにも充分な理由があった。

おそらく、はじめは一般的な鏡を修法に使用していたのだろう。ところが准提信仰が広まるにつれ、ただの鏡ではなく、准提に関係した仏像や梵字・真言が文様として相応しいとして、このような鏡が製作されたと推測される。さらに鏡壇に用いるため、柄を備え台に固定するようにしたものもできた。また、鈕がある鏡には梵字をその周りに配したのも考えだされた。これには、布字法が関係したであろう。またさらに准提と深く関わる、六字真言が単独でも用いられた。

そして、仏像を表現した鏡の場合、修法を行う際に、鏡面と行者が向かい合うことになるので、准提像の背面を文様とした鏡を考案し製作した。これならば、鏡に向かうと同時に、准提像に向かい合うことが可能になる。これら製作の背景には、円相を尊ぶ中国の発想や、鏡を重視する道教の影響も当然存在したであろう。さらにその性格を考えると、准提信仰に関わる鏡は、単なる化粧道具ではなく、修法道具や、お守りとしての宗教的意味合いが非常に強いといえる。

以上の八種類の鏡は、それぞれ形式が異なり、一時期に同じ場所で作られたとは考えにくい。しかし、明代の形式を備えた作例も存在し、さらに明清時代の准提信仰の流行を考えれば、従来元時代頃と考えられていたこれらの鏡も、やや下った時代に製作された場合が多いのではないだろうかと推測される。いずれにせよこれらの鏡は、中国における准提信仰の一面を、非常に良く表現した遺品であるといえる。

今回は、資料の紹介に止まった。また、鏡背文様のみに限定し、鏡像については複雑になるため触れなかった。これらの鏡についてはなお問題点も多く、准提信仰に関してもまだ解明されていない部分が多い。これから資料の収集と共に注目していきたい。